

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370402

研究課題名(和文) 画像石を媒介とした漢代語り物文芸の復元に関わる研究

研究課題名(英文) Research on the Reconstruction of Han-era Narrative Literary Arts through the Media of Portrait Steles

研究代表者

柳川 順子 (Yanagawa, Junko)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：60210291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、漢代の墳墓の内壁に彫られた図像(画像石)を通して、当時の宴席で歴史故事を題材とする口承文芸が行われていたことを明らかにしたものである。主な論拠として、歴史故事を描く画像石が、しばしば宴の様子を活写する図像に隣接して現れること、それらの歴史故事が文献上に残されている場合、その文体の随所に、語られ演じられていた痕跡が認められること等を示した。加えて、宴席という場と歴史故事との親和性を示す事象として、漢代の宴席芸能である舞の歌詞(楽府詩)に、画像石に頻見する歴史故事が詠われていることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：By examining portrait steles carved into the walls of tombs from the Han period, this study has made it clear that oral folklore based on historical events was recounted at banquets held at that time. The main grounds of this argument are that portrait steles that depict historical events frequently appear next to icons that vividly depict feasts, and it has been shown through the surviving written records that the entire literary style of these documents suggests that these narratives were acted out. Additionally, the affinity between the setting of a banquet and historical events is shown in the fact that the entertainment during Han period banquets consisted of Pi wu poems (Yue fu) which were frequently composed of historical events described in the portrait steles.

研究分野：中国古典文学

キーワード：画像石 歴史故事 宴席 語り物 演劇 楽府詩

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 漢代の墓室空間を飾る画像石については、考古学、宗教学、芸術学など様々な学術分野の研究者がこれに注目し、この資料から当時の社会や思想の状況を読み取るうとする試みが、近年とみに盛行している。文学の方面でも、漢代五言詩歌の社会的背景を画像石の中に読み取るうとする論<sup>(注1)</sup>や、昇仙を詠じた楽府詩(歌謡)と画像石に描かれた世界との間に関連性を見出そうとする論<sup>(注2)</sup>も出ている。

(2) 報告者は本研究に先立つ十余年間、漢代五言詩歌の発祥とその展開経緯を明らかにしてきたが<sup>(注3)</sup>、その過程で上記の様々な先行研究に示唆を受け、当時の宴席文芸である五言の詩歌と、宴席の様子を描く画像石との間に、何らかの接点があるらしいことに留意してきた。また、初期の五言詩に死後の世界が詠じられる理由を探る<sup>(注4)</sup>上で、漢代における死生観の変質と陵寝制度の普及<sup>(注5)</sup>に着目し、ここにも死後の世界を彩る画像石との接点があることに気付かされた。

(3) 画像石研究とは別に、古代中国において歴史故事を題材とする語り物や演劇が行われていた可能性のあることを、『史記』独特の文体から推論する先行研究<sup>(注6)</sup>に示唆を受け、漢代五言詩歌の中にも、当代の宴席における演劇的文芸の上演を背景に成立したと見られる作品があることを指摘した<sup>(注7)</sup>。

(4) 上記のような研究経緯を経て、報告者は次のような見通しを持つに至った。すなわち、漢代画像石の中には、さまざまな図像に混じって、歴史故事を描写するものが一部に認められるが、この種の画像石は、当代の宴席で演じられていた、歴史故事を題材とする語り物や演劇を描写したものではないか、との仮説である。

なお、これまでも漢代画像石に語り物を結びつけて論じる研究<sup>(注8)</sup>がなかったわけではない。ただ、両者の関係性そのものに対する詳しい検討は為されてこなかったように見受けられる。

(注1) 趙敏俐「文人五言詩与古詩十九首」(『両漢大文学史』吉林大学出版社、1998年)。

(注2) 道家春代「漢代昇仙楽府と画像石」(『名古屋女子大学紀要(人文・社会)』48、2002年)。

(注3) 平成20(2008)~22(2010)年度には科研基盤研究(C)の助成を受け(研究課題20520335)その成果は、『漢代五言詩歌史の研究』(創文社、2013年)として、日本学術振興会の出版助成を受けて公刊した。

(注4) 前掲書(注3)第三章第三節。

(注5) 曾布川寛『中国美術の図像と様式研究篇』(中央公論美術出版、2006年)

「古代美術の図像学的研究」、佐原康夫「漢代祠堂画像考」(『東方学報』63、1991年)を参照。

(注6) 宮崎市定「身振りと文学 史記成立についての一試論」(『中国文学報』20、1965年)。

(注7) 前掲書(注3)第二章第二節第三項、及び第四章第四節。

(注8) たとえば鶴間和幸「秦始皇帝諸伝説の成立と史実 泗水周鼎引き上げ失敗伝説と荊軻秦王暗殺未遂伝説」(『茨城大学教養部紀要』26、1994年)。

## 2. 研究の目的

上記の経緯を経て得た見通しを起点に、次のような目的で研究を遂行した。

(1) 歴史故事を描く漢代画像石は、当時の宴席において、身振りを交えた語り物文芸が行われていたことを示すものではないか、との仮説の当否を検証する。

(2) 上記仮説の妥当性を明らかにした上で、画像石に描かれた歴史故事を通して、漢代の宴席で行われていた口承文芸の復元を試みる。

## 3. 研究の方法

上記の目的のうち、本研究の基盤を為すのは(1)である。この仮説の妥当性を精確に検討する上で、次のような方法を取った。

(1) 近年陸續と出版されている画像石・画像磚の拓本資料や、墓室内に描かれた絵画の写真・模写資料等を調査して、そうした場に出現する歴史故事の題材を網羅的にピックアップする。

(2) 歴史故事を描く画像石類(画像磚や絵画も含む)の空間的意味を探る。すなわち、あるひとつの墓室内に描かれた画像全体の中で、歴史故事を描くものがどのような位置に現れ、どのような図像と隣り合っているかを精査する。これにより、歴史故事が宴席で行われる口承文芸であった可能性の有無を検証する手がかりが得られる。

(3) 画像石類に現れる歴史故事が、文献上に書き留められている場合、そのテキストの構成や文体に、元来それが語られるものであった可能性を示唆する痕跡が認められるかどうかを精査する。具体的には、前掲の宮崎論文が指摘する特徴、すなわち、個人的動機に発する筋書き、用意周到に張られた伏線、

同一の語句や文の繰り返し、身振りを描写する表現、切迫した場面に現れる、話の筋とは無関係な言葉（合いの手のような）等々に加えて、報告者がかつて注目した（前掲注7）歌謡や舞踊の挿入、演劇のト書きを思わせる表現などにも注目する。

（4）画像石類に描かれる歴史故事と、他の文芸ジャンルとの関係性、特に漢代に盛行した楽府詩（俗楽歌舞の歌詞）との影響関係、及び後世の通俗文学（唐代の変文、元曲など）への継承関係を視野に取り込む。これにより、漢代画像石類に見える歴史故事が、元来どのような性格の文芸であったのかを考究する手がかりが得られる。

#### 4. 研究成果

公刊した主な研究成果、及び今後の課題は次のとおりである。

（1）現存する画像石類に現れる歴史故事を諸々の資料<sup>(注1)</sup>によって調査した結果、先行研究<sup>(注2)</sup>の指摘するとおり、次のような歴史故事が多く題材に取り上げられていることを確認した。すなわち、「孔子見老子」「周公輔成王」「二桃殺三士」「藺相如完璧帰趙」「荊軻刺秦王」「泗水升鼎」の六題、次いで「邢渠哺父」「秋胡戲妻」「驪姫置毒」「高祖斬蛇」「季札挂劍」「蔡襲趙盾」「董永侍父」<sup>(注3)</sup>といった故事である。

（2）上記の歴史故事の中から、「二桃殺三士」を例に取り上げて、この故事を記す『晏子春秋』諫下「景公、勇士三人を養ひて、君臣の義無し。晏子諫む」の文体を分析した。その結果、宮崎前掲論文が「荊軻刺秦王」(『史記』刺客列伝)を対象に行った分析と同様な特徴を認めることができた(後掲論文)。 「荊軻刺秦王」「二桃殺三士」を特徴付けるこうした文体は、「季札挂劍」(劉向『新序』節士)、「鴻門宴」(『史記』項羽本紀)等にも認められる。なお、「鴻門宴」については、唐代の『封氏聞見記』巻6「道祭」に、当時の葬祭で実際に演じられていたことが確認された。このほか、「專諸刺吳王僚」に連なる故事を、会話体を中心に、要所に歌謡を挟むスタイルで記す後漢の趙擘『吳越春秋』にも、語り物的要素が多分に含まれている可能性があるが、このことの検証は今後の課題である。

（3）画像石に描かれた歴史故事を文献上に探索する過程で、現存する文献と画像石との間に、若干の食い違いが認められるケースがあるという気づきを得た。たとえば「孔子見老子」にはほぼ必ず描かれている項橐という子ども、あるいは「曾母投杼」の図像が示す、まさしく曾子の母が機織を止めてふり返る場面などは、これを記す『史記』や『戦国策』

では、たとえ話として言及されるに過ぎないが、画像石ではその故事を象徴的に示す事物として明示される。他方、「泗水升鼎」の故事に言及する『水経注』泗水注には、「故語曰(故に語に曰く)」に始まる引用文が見えている。こうした現象から推し測るに、文献上に記されているのは、当時語られていた歴史故事の冰山の一角に過ぎず、その氷山の基層にある物語を、画像石類が示唆している可能性がある。この仮説の検証は今後の課題である。

（4）歴史故事を描く画像石の空間的意味を探るため、墓室全体が伝存している浙江省海寧県長安鎮海寧中学出土漢墓<sup>(注4)</sup>を取り上げて、そこに見える「荊軻刺秦王」が、邸宅の内庭、厨房、宴飲の場、舞踊・雑技・武術を披露する人々を描いた図と隣り合って同一空間を占め、しかも荊軻や秦王を描く筆致が、舞人たちの図の描線に等しいことを指摘した。同様な事例として、河南省唐河針織廠墓に、「二桃殺三士」「聶政自屠」「晏子見齊景公」「范雎受袍」といった複数の歴史故事が、楼閣、楽舞、宴席で六博に興じる人々の姿に隣接して見えていること<sup>(注5)</sup>、山東省沂南漢墓において、車馬行列、客人の迎接、饗宴、楽舞百戯の図を連ねる墓室内に、「衛姫諫齊桓公」「藺相如完璧帰趙」「蔡撲趙盾」などの歴史故事が、歌舞戯の一場面を思わせるような緊迫した筆致で描かれていること<sup>(注6)</sup>が挙げられる(後掲論文)。

（5）画像石類に見える歴史故事と、同時代あるいは後世の俗文学と関わりを指摘した。たとえば、「秋胡戲妻」の画像石と漢代の楽府題「秋胡行」や唐代の絵解き物語「秋胡変文」、画像石「專諸刺吳王僚」などに登場する伍子胥を主人公とした「伍子胥変文」、画像石「董永侍父」と「董永変文」、また前述の「孔子見老子」に現れる子ども「項橐」と孔子との対話を語る変文「孔子項託(橐)相問書」はその一端であり、さらに「蔡襲趙盾」「桑下餓人」などの画像石が描く「趙氏孤児」の物語は元曲(元代の戯曲)に結実している。こうした現象は、画像石類に見えている歴史故事が、元来は民間に流布する語り物文芸であった可能性を示唆する。つまり、広大な基層を持つ口承文芸から、たまたまその一部が画像石に描かれ、また他方、文字に記される機縁を得て伝存するのが上記の諸作品ではないかと見るのである。この構想は、後掲論文で触れてはいるが、詳しい検証は今後の課題である。

（6）その歌辞は失われているが、後漢王朝の宴席で上演されたことは明らかな「鼙舞(鼙鼓を持って舞う雑舞)」の歌辞について、魏の曹植による替え歌「鼙舞歌・聖皇篇」が漢の「鼙舞歌・章和二年中」の忠実な再現であることを論証し、これを梃子として、漢代

鼙舞歌辞の復元を図った。その上で、そこに歌われている孝子や孝女の話が、画像石類にも頻見すること、宴席で行われた歌舞音曲にも現れるものであることを指摘し、画像石類に描かれたこれらの話は、宴席という娯楽的な場に深く馴染むものであり、そうした場で行われる諸文芸の題材となったことを論じた(後掲論文 )。

以上の研究成果のうち、(1)～(5)は、これまで明確な論拠が示されていなかった画像石と語り物文芸との関係について、始めて本格的な検討を試みたものである。中国の研究者の間では、画像石に見える歴史故事を、当時の儒教精神に結びつける所論が主流を占めているように見受けられるが(注7)、本研究が提示するのは、それとは異なる視座である。学术交流の機会があれば、こうした視点の可能性を投げかけてみたい。

なお、本研究に先立って、小南一郎「漢代における演劇の可能性」(『桃の会論集』6集・小南一郎先生古希記念論集、2013年10月)が公刊されているが、報告者が本研究の申請を行った2012年10月当時、これを目睹することは不可能であった。また、後掲の学会発表、及び論文の執筆当時においても、不覚にもこの先行研究の存在を知らなかった。論述内容に重なる部分もあるので、特にここに付記しておく。

(6)の成果については、後掲の学会発表において、特に中国の研究者から予想外の高評価を得た。漢代「鼙舞歌」は、その歌辞が現存しないためか、これまでほとんど論じられることがなかった対象であるが、曹植の作品を媒介としてこれを復元した着眼点の斬新さ、及び論証の精緻さにおいて、見習うべき日本独特の学風であるとの感想も寄せられた。後掲論文はその結果である。

今後の展望としては、先述のとおり、画像石類やいくつかの文献を通して、漢代語り物文芸の復元を、今後も継続的に試みる予定である。これに平行して、五言「詠史詩」というジャンルの成立経緯を、本研究でほぼその存在が論証された漢代語り物文芸との関わりという視点から考究したい。研究開始当初の背景(2)に記したように、五言詩は漢代の宴席を舞台に生成展開したが、他方、歴史故事をテーマとする語り物文芸も、同じ時代の宴席で行われていた。それならば、この宴席という場に注目することによって、歴史を詠じる五言詩「詠史詩」が、五言詩史上、比較的早い段階に当たる漢魏に登場した経緯も明らかにできるだろう。この見通しの検証は、次の研究課題「漢代宴席文芸と建安文学との継承関係に関わる研究」(基盤研究(C)課題番号:16K02593)で行う。

(注1)『中国画像石全集』全8冊(山東美術・河南美術出版社、2000年)、『中国画像石全集』全3冊(四川美術出版社、2006年)等を縦覧した。

(注2)張文靖「論漢代墓室画像石中三箇歴史題材的辟邪鎮墓功用」(『中国漢画学会第九屆年会論文集(上)』(中国社会出版社、2004年))。

(注3)張道一『漢画故事』(2006年、重慶大学出版社)の題目に拠る。

(注4)嘉興地区文管会・海寧県博物館「浙江海寧東漢画像石墓発掘簡報」(『文物』1983年第5期)、岳鳳霞・劉興珍「浙江海寧長安鎮画像石」(『文物』1984年第3期)、黄雅峰『海寧漢画像石墓研究』(浙江大学出版社、2009年)を参照。

(注5)河南省博物館・南陽博物館「唐河針織廠漢画像石墓の発掘」(『南陽漢代画像石墓発掘報告集』中州古籍出版社、2012年。初出は『文物』1973年第6期)を参照。

(注6)曾昭燏・蒋宝庚・黎忠義『沂南古画像石墓發掘報告』(文化部文物管理局出版、1956年)、長廣敏雄『漢代画像の研究』中央公論美術出版、1965年)を参照。

(注7)鄭紅莉「陝北漢代画像石歴史故事題材的区域特徴与社会意義」(『文博』2012年8月15日)のように、報告者と近い視点を持つ研究もある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

柳川順子、漢代画像石と語り物文芸、中国文学論集、査読有、43号、2014年、pp.11-20

柳川順子、漢代鼙舞歌辞考—曹植「鼙舞歌」五篇を媒介として、中国文化、査読有、73号、2015年、pp.1-13

柳川順子、漢代鼙舞歌辞考—以曹植《鼙舞歌》為線索—、楽府学(中国・首都師範大学中国詩歌研究中心)、査読有、12輯、2015年、pp.55-63

〔学会発表〕(計2件)

柳川順子、漢代画像石と語り物文芸、第269回九州大学中国文芸座談会、2013年11月17日、大野城まどかぴあ

柳川順子、漢代鼙舞歌辞考—以曹植《鼙舞歌》為線索—、楽府学会第2回年会・第5回楽府詩歌国際學術研討会、2015年8月23日、北京裕龍大酒店

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

柳川 順子(YANAGAWA, Junko)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号:60210291